

十一月定例能番組

令和二年十一月一日(日) 午後一時始
於 石川県立能楽堂

三

シテ 佐野 由於
輪 ワキ 平木 豊男

大鼓 亀井 洋佑
小鼓 住駒 幸英
太鼓 麦谷 暁夫
笛 江野 泉

間 荒井 亮吉

後見 松田 若子
廣島 克栄

地謡 寺田 茂 佐野 玄宜
岩井 嘉樹 大坪喜美雄
笠間 啓 高橋 憲正
山崎 健 松本 博

休憩 二十分

江口

クセ (仕舞)

渡邊荀之助

地謡 藪 藪 克徳
高橋 俊彦
木谷 右任 哲也

蟹山伏

(狂言)

山伏 炭 哲男

強力 清水 宗治
蟹の精 若生 敏郎

後見 山田 讓二

鶴

シテ 渡邊 茂人

ワキ 北島 公之

大鼓 飯嶋六之佐 太鼓 麦谷清一郎
小鼓 住駒 俊介 笛 室石 和夫

間 中尾 史生

後見 高橋 右任
福岡 聡子

地謡 船本 嘉人 佐野 弘宜
酒井 章 島村 明宏
中村 清 藪 克徳
田屋 邦夫 木谷 哲也

終了 午後四時半頃

能三輪 (みわ)

和州三輪の山陰に住む玄賓僧都 (ワキ) の草庵に、いつものように櫓と閑伽の水を持って中年の里の女 (前シテ) が訪れます。秋の終わり、風の寒い月夜のことです。柴の編み戸を押し開いた女はいきなり罪をお助けくださいといい、玄賓の衣を申し受けて、去り際に住みかを明かし、三輪の山もと杉の木が目印と言います (中入)。その場所を玄賓が訪ねると、杉の木 (作り物) には女に与えた衣が掛かり、金文字で和歌が書き付けてありました。やがて杉の木の陰から声がして美しい女性の神 (後シテ) が烏帽子・狩衣の男装で現れ、再度罪を助けたまへと玄賓にすがりますが、これは衆生済度の方便らしく、三輪の地名起源の神婚説話 (神は男性) を語り神楽を舞って、その始まりとされる天の岩戸の神遊びをまねるなどむしろ玄賓を慰めます。玄賓は神話と神楽から伊勢と三輪の一体分身説に思い当たり、それらの神秘に誘われた幸せにひたって夢の名残を惜しみます。

狂言 蟹山伏 (かにやまぶし)

大峰、葛義の修行を終えて意気揚々と下向する羽黒山の山伏が、強力と二人、ものさびしい深山にさしかかりました。どうどうと鳴る音がし、まっ黒になったかと思つと、謎めいた名のりをし、横に跳ぶ者が出て、これを蟹の精と解いたまではさすがに生不動です。ところが、ちよつかいを出して蟹に耳を挟まれた強力を助けようと、山伏の唱える呪いはあやしげですし、効き目がなければかりか自分も耳を挟まれ、二人ともに突き倒されます。

能 鶴 (ぬえ)

諸国一見の僧 (ワキ) が熊野参りの帰り道に芦屋の里に着き川渡ししの御堂に泊まります。夜更け方、空舟に棹さして不思議の者 (前シテ) が漕ぎ寄せ、僧に心の闇を吊われたいと頼みます。人間とは見えないその者は近衛院の御宇に頼政の矢先に掛かつて落命した鶴の亡心です。夜な夜な丑の刻限に御殿を覆う黒雲が主上を悩ませるといので、頼政が選ばれて警固に当たり、射殺してみると頭は猿、尾は蛇、足手は虎、鳴く声は鶴に似た変化の者でした。隠れない世語りに執着する心を翻して成仏の機縁としたいところですが、鶴の亡心は夜の波間に浮き沈みして消えます (中入)。亡心は僧の読経に感謝して今度は鶴本来の姿 (後シテ) を現します。そして頼政に退治された時の様子をもう一度思い出し、頼政は功名を挙げ自分は天罰が当たって汚名を流したと、当时を振り返ります。死骸は空舟に押し込められ、淀川を流された果てが、芦屋の浮洲に留まり朽ちる現在でありました。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 令和二年十二月六日 (日) 午後一時始

(能) 絵馬 (狂言) 栗焼 (能) 鍾馗